

# リビングルームのインテリアスタイル日米欧比較

## —— 室内意匠のシンボル性に関する研究 その4 ——

松 原 小夜子\*

### I. 研究の目的

本研究は、わが国の室内意匠の特質および変化プロセスを、インテリアの記号性あるいは記号価値という側面からとらえようとする研究の第4報である<sup>1)</sup>。

第1報から第3報では、1990年前後の各種調査にもとづき考察をおこなった。第1報と第2報では、①リビングルームのインテリアの主要要素はイス・ソファの張地と様式であり、これを基準にすると、リビングルームのインテリアは〈革張〉〈布張クラシック〉〈布張モダン他〉〈イス・ソファなし〉の4つに類型化できること、②これらのうち〈革張〉は高級イメージを有し、ステータスシンボルとしての意味合いが強いと推察され、この背景にはインテリア情報の影響が大きいこと、③〈布張クラシック〉は〈革張〉よりもさらに高級感が強いが大衆的な普及には至っていないことなどを明らかにした。この現象を歴史的に振り返って考察した第3報では、〈革張〉は、高度成長期に大衆的に普及した〈布張モダン他〉との差異化要求を背景にして昭和40年代後半から登場してきたワンランク上のインテリア類型であり、ステータスシンボル性を有しながら徐々に普及し、バブル経済期の経済的ゆとり感とともに中間層上層に普及したことを示した。つまるところ、リビングルームのインテリア変化は、通時的な上位から下位への階層伝播のプロセスだったといえる。

ところで、インテリア変化を階層伝播のプロセスとしてとらえた場合、もう一つ忘れてはならない点がある。それは、リビングルームのインテリアが、わが国の伝統スタイルではなく、多かれ少なかれ「西洋」の模倣であることだ。インテリア変化は、あこがれの「西洋」から日本へという異文化間の伝播でもあっ

た。本報では、この点に着目してみたい。では、モデルとなった「西洋」とはどこかの国なのか。明確なモデルはあったのだろうか。〈革張〉や〈布張クラシック〉がステータスシンボル性を有した背景には、西洋の影響はどの程度あったのだろうか。こういった問の一端に答を見いだすため、西洋インテリアを主導してきた欧米5か国と日本との比較をおこない、共時的な「西洋」の日本への影響を探ったうえで、インテリアの記号性について考察を加えたい。

なお、表題にもある「インテリアスタイル」とは、クラシックやモダンといったいわゆるインテリア様式を指すだけではなく、インテリアエレメントの種類や材質なども含めた広い概念として用いているとご理解いただきたい。

### II. 研究の方法

1990年前後に、日本、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ各国で刊行されたインテリア関連雑誌を用いてデータを収集した。各国ともに、インテリア関連雑誌に掲載されている、実際に建築された一戸建て専用住宅に限定して、リビングルームのインテリアエレメントの種類や様式を把握した。なお、雑誌掲載写真からのデータ抽出であるため、リビングルームの全体が把握できるとは限らない。写真に写っている範囲でインテリアエレメントをとらえた。

日本の雑誌データは、「新住宅」「住まいの設計」「住宅特集」1989年6～9月号、「モダンリビング」1988年 No. 58、「別冊ニューハウス」1988年 No. 28各誌に掲載された101例である。これらはいずれも新築住宅の事例である。なお、日本については、1989年の一戸建住宅調査と1990年のマンション調査のデータ計176例を「調査データ」として合わせて考察することにした。調査データの詳細は既発表論文をご参照いただきたい<sup>2)</sup>。

\* 本学生生活学科住生活専攻教授(室内意匠学、住居学)

アメリカは、「HG」1992年6, 9, 10月号, 「UNIQUE HOMES」1991年12-1, 1992年2-3, 4-5, 6-7月号からの計127例である。イギリスは、「HOUSE & GARDEN」1992年5, 6, 7, 8, 10月号, 「THE WORLD OF INTERIORS」1992年5, 6, 7月号からの計48例である。フランスは, 「maison」1992年4, 5, 6, 7, 9, 10月号, 「marie claire」1991年9, 10, 11, 12-1, 1992年2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11月号からの計102例である。イタリアは, 「ELLE DECOR」1992年4, 5, 6月号, 「LA MIA CASA」1992年5, 6月号, 「ABITARE」1991年5, 6, 7-8, 9, 10, 11, 12, 1992年1, 3月号からの計76例である。ドイツは, 「SCHÖRNER WOHNEN」1992年1, 2, 3月号, 「Zuhause Wohnen」1992年4, 5, 6, 7, 8, 9月号, 「HÄUSER」1991年3, 4, 5, 6月号, 1992年1, 2, 3, 4月号からの計103例である。欧米データは, 合計504例である。欧米データは新築住宅とは限らない。日本とは違い住宅寿命が長い欧米では, ストック住宅の改装例を, 多数紹介しているためである。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. インテリア様式について

研究の目的でも述べたように, 日本のリビングルームを対象とした既存研究では, インテリアスタイルを特徴づける主要要素はイス・ソファの張地と様式であることがわかっている<sup>3)</sup>。本報でもまずはじめに, この点の傾向をみてみたい(図1)。なお, 日本の場合には主要なイス・ソファの様式をとらえれば十分であったが, 欧米のインテリアでは様々な様式が混在

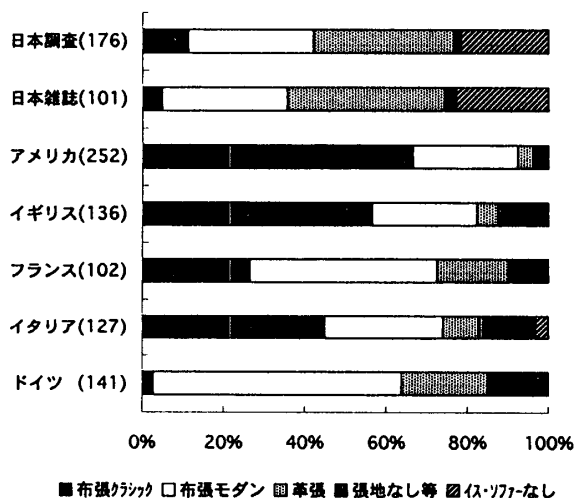


図1 イス・ソファの張地と様式

する例が多いので, イスやソファを個別にカウントした。

1990年当時の日本では, 布張クラシックはあまり普及しておらず少数である。これに対してアメリカやイギリスでは, 半数以上が布張クラシックである。イタリアやフランスでも日本よりは多い。この点が第一の相違点である。また, 日本では革張が大きな位置を占めていたが, 欧米ではいずれの国でも日本のようには多くない。モダンスタイルが主流のドイツでも布張モダンが中心である。革張の普及は, 今回の比較の範囲内では日本固有の現象らしい。

欧米では様々な様式が混在するインテリアが多いといわれている。そこで, リビングルームで用いられている家具を総合して様式をとらえてみたのが図2であ

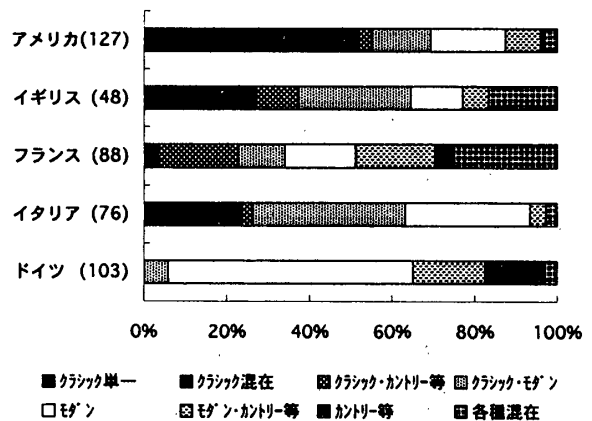


図2 インテリアの様式

る<sup>4)</sup>。異なる様式の混在(ミスマッチング)は, イギリス, フランス, イタリアに多く, とりわけフランスにおいて顕著である。アメリカはクラシックに, ドイツはモダンにと傾斜していることがわかる。

#### 2. イス・ソファの配置とテーブル

イス・ソファの配置の仕方を図3よりみしてみる。日本では, 洋室のリビングルームであっても, イスの置かれていない空いた床面に座る習慣があるので, 床面に座りやすくイスやソファをL字や一列に配する例が多い。欧米ではL字や一列は少なく, イスやソファに座ることを前提とした対面式や囲い式などの配置が中心である。また, アメリカ, フランス, イタリアの「その他」のように, イスを自由に配置するものや, すわる拠点が複数あるものが多いことも特徴である。

リビングルームに置かれるテーブルの種類をみると

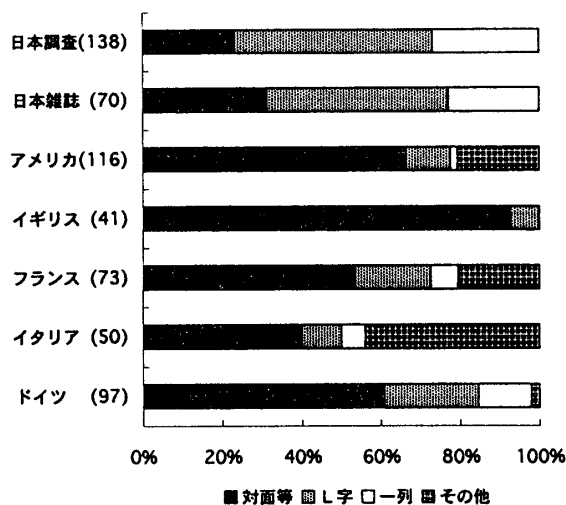


図3 イス・ソファの配置

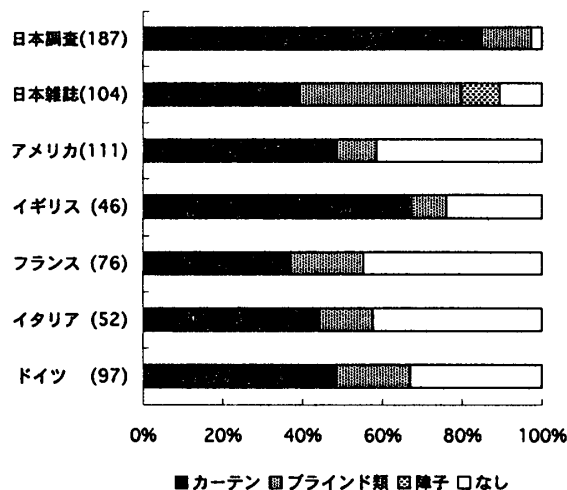


図5 窓まわり

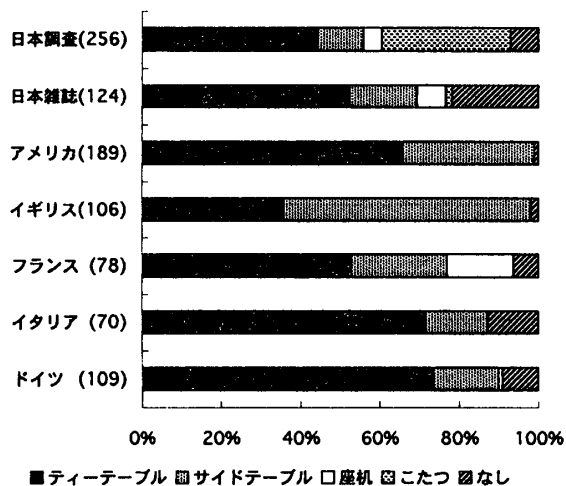


図4 テーブルの種類

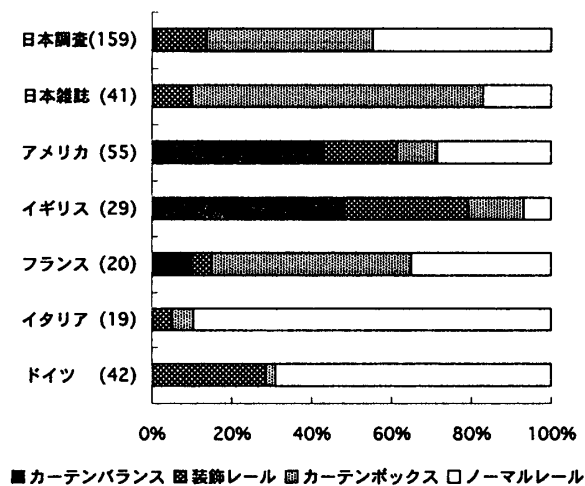


図6 カーテンの取り付け方

(図4)、日本ではサイドテーブルが少ないこと、座机やこたつの使用などに特徴がある。欧米では、日本に比べてサイドテーブル類の使用が多い。イスにすわって暮らすには、生活行為の補助具として、多種のテーブル類が不可欠なのである。

### 3. 窓まわり (ウィンドトリートメント)

各国ともにカーテンを用いる例が多い(図5)。日本の雑誌データでは、カーテンの他にブラインド類<sup>5)</sup>が多いこと、障子が使われていることなども特徴である。欧米では、窓に何も付けない例もかなりみられる。これらは戸外のルーバーを用いているのではないと思われる。戸外からの視線を気にしなくてもよいような敷地条件の違いも大きいようだ。

カーテンの取り付け方をみると(図6)、クラシカ

ルなイメージのカーテンバランスは日本ではほとんど用いられておらず、カーテンボックスが主である。これに対して、クラシック様式のイス・ソファが多かったイギリスやアメリカでは、カーテンボックスは少なく、カーテンバランスや装飾レールが多いことがわかる。モダンが主流のドイツでも、日本に比べると装飾レールが多い。

### 4. 証明器具

図7より証明器具の種類をみてみる<sup>6)</sup>。日本では、スタンド類は少なく、ペンダント類、ダウンライト類、天井灯類が多い。天井に取り付ける器具が中心なのは、日本では天井からの全般照明が好まれるためであろう。欧米では逆に、テーブルスタンド、フロアスタンドなどのスタンド類が多く使われており、天井

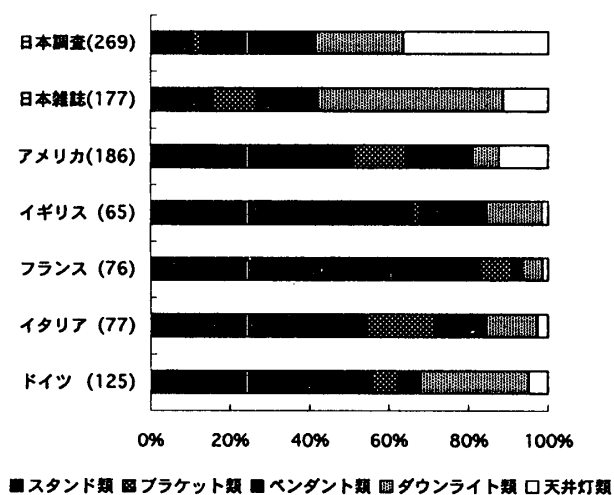


図7 照明器具

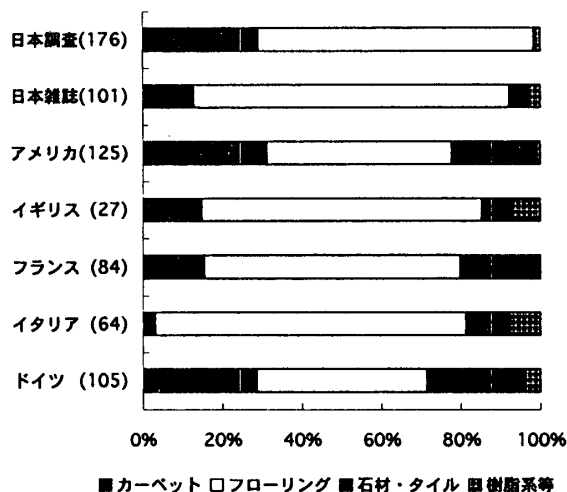


図8 床材

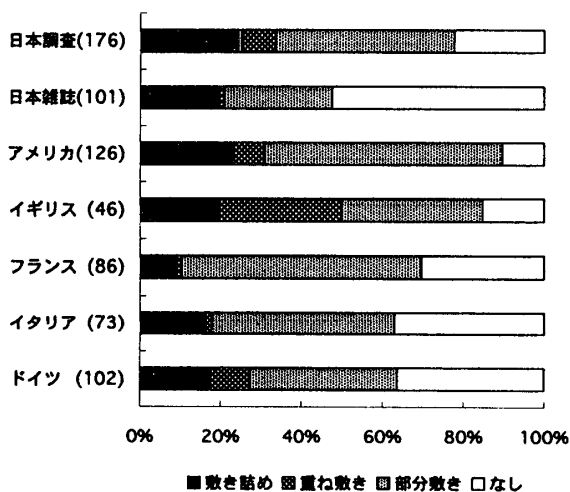


図9 敷物

灯類は極めて少ないことが特徴である。

## 5. 床材と敷物

床材については(図8)、各国ともにフローリングが主流である。欧米では、石材やタイルなどの仕上げも多く、日本にくらべると、若干多様性があるといえる。

床上の敷物では(図9)、クラシック様式のイス・ソファが多かったアメリカとイギリスにおいて、敷物の敷き詰め、重ね敷き、部分敷きなど、敷物を敷く例が9割近くを占めていることが特徴である。

なお壁材と天井材については、資料の性質上塗装類とクロス類との区別がつけにくかったので、今回は分析の対象からはずした。

## 6. 各国のインテリアスタイルの特徴

以上のインテリアエレメントごとの結果をふまえると、各国のインテリアスタイルの特徴は以下のようにとらえられる。

既報でも述べてきたように、日本はモダンスタイルが主流である。イス・ソファ類に革張りが用いられることも欧米諸国には見られない特色である。また、床にも座ることを前提とした家具の配置、座机やこたつの使用など、日本の伝統スタイルとモダンスタイルとの混在もうかがえる。カーテンボックス設置、ダウンライトや天井灯設置なども特徴である。これらを総合すると、日本のリビングルームのインテリアは確かに西洋風ではあるが、今回調べた欧米のどの国とも違う特有のインテリアスタイルであることがわかる。

欧米諸国では、ドイツを除いて、クラシック様式の家具が多く使われている。さらに、イスに座って暮らすことを前提としたイスの配置やテーブルの配置、カーテンバランスや装飾レール、敷物、スタンド類の利用などが各国共通の特徴である。1990年当時の日本と比べて相対的に最も近い国は、モダンを主流とするドイツである。逆に最も遠い国は、クラシックを主流とするアメリカとイギリスである。両者の中間がフランスとイタリアといえる。フランスとイタリアは、異なる様式のミスマッチングや、自由な家具配置など、インテリアスタイルの多様化が特徴である。

## 7. インテリアの記号性に関する考察

1990年当時の日本のインテリアの特徴は、〈革張〉のインテリア類型が高級イメージを有して普及したことであった。しかし、少なくとも今回の欧米の雑誌

データからは、〈革張〉を主流とする国は見いだせなかった。つまり、西洋に明確なモデルはなかったことが明らかになった。〈革張〉の普及には、イタリアモダンの革張家具の流行が一因であったと考えられるが、当のイタリアでも革張モダンスタイルは普及していない。欧米諸国では、西洋世界の伝統様式＝クラシックスタイルが、根強く受け継がれている。クラシックスタイルあるいはクラシックを含むミスマッチングが、欧米インテリアの主流である。

今回の結果にもとづけば、〈革張〉の高級イメージは、日本で固有に形成されたとの見方が成り立つ。わが国における大衆的なインテリアの洋風化は、戦後、シンプルなモダンスタイルからはじまった。モダンスタイルの源流を考えれば納得のゆくことだが、モダンスタイルは日本人にはなじみやすい。われわれは、モダンスタイルの枠組みの中で、経済成長とともに、少しずつインテリアの高級化を進めてきたのである。その行き着いた先が〈革張〉だったと考察できる。したがって、〈革張〉のステータスシンボル性は、すでに大衆化していた〈布張モダン他〉に比べて高級であるという「差異性」に依拠していたのである。〈革張〉のステータスシンボル性は、モダンスタイルになじんできた我々の指向性と、インテリア関連メディアのつくり出すイメージとによる恣意的産物だったようだ。この差異性と恣意性にこそ、インテリア変化を「記号性」というキーワードでとらえ得る根拠があると考察できる。

ところで〈布張クラシック〉も高級イメージを有しているが1990年当時にはあまり普及していなかったことをはじめに述べた。今回のデータ分析の結果から考察すると、〈布張クラシック〉の高級イメージについては、西洋との関連が深いといえる。クラシックスタイルは、'90年代のわが国のインテリアにかなりの影響を与えることになるのだが、この点をふくめ、'90年代以降の新たな展開については、稿をあらためて論じられればと考えている。

#### IV. 要約

本報告では、〈革張〉や〈布張クラシック〉のインテリア類型がステータスシンボル性を有した背景を、「西洋」の日本への影響という側面から探ることを目的として、日本の雑誌および調査データと、西洋インテリアを主導してきた欧米5か国の雑誌データにもとづき、1990年前後のインテリアスタイルの比較を試み

た。その結果、以下の諸点が明らかになった。

①日本のリビングルームのインテリアは確かに西洋風ではあるが、日本の伝統スタイルとモダンスタイルとが混在しているなど、今回調べた欧米のいずれの国とも異なるわが国特有のインテリアスタイルであることがわかった。

②欧米諸国のリビングルームのインテリアでは、西洋世界の伝統様式＝クラシックスタイルが根強く受け継がれていることや、クラシックを含む様式のミスマッチングなどが特徴であることがわかった。

③〈革張〉を主流とする欧米の国は見いだせなかった。今回の結果にもとづけば、〈革張〉の高級イメージは、日本で固有に形成されたとの見方が成り立つ。

④〈革張〉のステータスシンボル性は、〈布張モダン他〉より高級であるという「差異性」に依拠しており、モダンスタイルになじんできた日本人の指向性と、インテリア関連メディアのつくり出すイメージとによる恣意的産物だったと考えられる。この差異性と恣意性にこそ、インテリア変化を「記号性」というキーワードでとらえ得る根拠があると考察できる。

⑤〈布張クラシック〉の高級イメージについては、西洋との関連が深いことがわかった。

なお本研究は、1992年度平安女学院短期大学個人特別研究費の補助を受けたことを付記する。

#### 注

1) 既報は以下のとおりである。

1. 松原小夜子：リビングルームの室内意匠類型と居住者属性との関係——室内意匠のシンボル性に関する研究その1，平安女学院短期大学紀要，No. 21，pp. 68-74，1990

2. 松原小夜子：リビングルームの室内意匠類型とインテリア情報との関係——室内意匠のシンボル性に関する研究その2，平安女学院短期大学紀要，No. 22，pp. 100-103，1991

3. 松原小夜子：戦後のリビングルームにおける室内意匠の変遷——室内意匠のシンボル性に関する研究その3，平安女学院短期大学紀要，No. 23，pp. 84-89，1992

4. 松原小夜子：洋風居間のインテリア類型と居住者属性及びインテリア情報との関係——洋風居間の地位表示性に関する研究その1，日本建築学会論文集，No. 469，pp. 65-76，1995

この論文は、上記1と2のデータに、マンション

ン調査および居住者意識調査のデータを加えて分析考察したものである。

- 2) 一戸建住宅調査については注1の文献1と4で、マンション調査については同じく文献4で報じている。
- 3) 室内意匠類型の基準となるイス・ソファの張地と様式について説明すると、〈革張〉とは、革張でモダン様式の場合を指している。クラシック様式のものも若干例あったが極めて少数なので〈革張〉として一括した。〈布張クラシック〉は、布張でクラシック様式のものを指しており、クラシックエレガンスなどと称される張りくるみソ

ファー類も含んでいる。〈布張モダン他〉の「他」には、カジュアル、カントリー、トロピカル、民芸、和風などを含めている。

- 4) クラシック混在とは、ロココとネオクラシックというようにクラシック同士の様式の混在を指している。カントリー等にはエスニック調を含めている。
- 5) ブラインド類には、ベネシャンブラインド、バーチカルブラインド、ロールスクリーンなどを含めている。
- 6) ペンダント類にはシャンデリアも含めている。